

フィールド風

(現場)からの

宮田守男

北京五輪での日本人選手の躍動は毎日の楽しみだが、スキージャンプのスーツ測定での処罰主義の現実、ハーパイプでの不可解

ジャッジなど複数の競技で疑惑報道が目立つ。ノルウェーの画家ムンクの代表作「叫び」の男の格好は、口に両手を当てて、叫んでいるのではなく、聞こえてくる叫びに耳をふさいでいるとの説もある。

テレビ放映の価値観が今後のスポーツの重要なテーマだ

る。五輪の舞台で不安を生じさせないシステムを強く望みたい。その影響ではないだろうが、北京五輪の米国内のテレビ視聴率は過去最低や米テレビネットワークNBCの名キャスター「マイク

ティリコ」は予定を繰上げて帰国の情報。五輪を支えるテレビ放映の価値が今後どうなるのか、毎晩大勢の観客が観る五輪番組から、ストーリーミングによるレース・演技など、人々が好きな時に見ら

た。長野五輪の前大会でのデサントの事を懐かしく思い出す。テスト大会と位置付けられたワールドカップは、テスト大会経費以外は、地元負担が原則だった。96ワールドカップ男子滑降競技の



書棚に眠る数多くの記録を見続けることが大切だ

いて、スキー関係者との交流も多く、地元関係者が愛用していたデサントユニホーム確保の要望が強かった。縫製作業を国内で行っており、競技役員が現場で要望する仕様に変更できやすいという理由だった。幸いな事に白馬村内にはデサントとのつながりが強いスキー関係者も多く、長野五輪で公式スポンサーのミスノウェアが足りない場合は、使用したいとの約束で2400着のユニホームが寄付された。

五輪開催が直前に迫り、白馬会場まで誘導する大北支援組織スタッフの防寒着確保が課題になり五輪組織委員会との了解を得て関係者に配布する事ができた。黒色と黄色のウェアは「動くタウンページ」の別名が付けられ話題にもなった。デサント支援を語り継ぐのも私たちの責任なのだろう。(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)